

な、陰也、あめつち、皆上古の時の語也、此類を自語と云、

〔東雅天文〕天アメ 義不詳、我國太古の代に、アメといひし其語同じくして、其名義異なるあり、アメ又轉じてアマといひしは、其斥いふ所ありと見えたり、漢字採用ひて、天讀てアメとなし、アメとなすに至ては、古語の義隠れしもまたありと見えけり、天をアメといひ、アマといひし義、舊言もといひ、同じからず、我國の語、我國のすがたあり、他方の言の如きも、また然ぞありける、(中略)アあり、至尊のあり、所なるなり、人の至て高くして上なきをもて、天に配して、アメといひしと見えけり、此等の事ども、能く我國の書を讀得たらん人の、自ら明かなるべき所なれば、此説を費すべき事にあらん、○下略

〔倭訓栞前編〕二 あめ 天をいふ、神代紀に、天上とも見ゆ、神名の首にある、天字は多くあめとよめり、古事記にあめといふには、註せず、あまと唱ふべきは、註あり、さればあめは本語、あまは轉語なるべし、又訓天如天とあるは、天のとのをいふまじきため也といへり、神代口訣に、開く聲といへり、自然の語なれば、強て義を求めがたし、

〔古事記傳〕三 天は虚空の上に在て、天神たちの坐ます御國なり、此外に理を以、こちたく説成し、或は其形などを、さましくおし、かりに云などは、皆外國のさたにて、古傳にかなはざれば、凡て取にたらず、(中略)阿米てふ名は、葦モエの切まりたるにて、斯の省かりたるにやあらむ、葦はた、譬に云る物なれども、成坐る神の御名にも、負たまへればなり、又吾友横井千秋云く、阿米とは、青所見の袁を省き、美延を約めたるなり、國にも、天をば着き物に云ること多し、又阿袁と云色の名も、本天より出たるにやあらむと云り、此考も然ることなり、

〔鎔造化育論上〕皇國訓天曰、亞滅、即意耶莫拽之約也、言日輪赫赫燃燎也、近來伊勢人本居宣長者著古事記傳、泥開關段有如葦牙萌騰之文、誤以為其萌騰者即是天也、因以訓亞滅為亞矢莫拽之約、非也、天若為亞矢莫拽之約、則不稱亞滅、而當呼異滅也、此翁頗精音義、而致此等謬妄者、未知天地之全體、而強鑿說天地之數理也、日天豈地球之所可分哉、

〔古事記中〕倭建命、○中 爾美夜受比賣、其於意須比之禰、意須比三著月經、故見其月經、御歌曰、比佐